

在外教育施設の運動会におけるダンスへの取り組みについて

— 日本人学校の運動会で期待されていること —

前リマ日本人学校 教諭

静岡県裾野市立須山小学校 教諭 板倉 基

キーワード：運動会、日系人、表現運動、ダンス

1. はじめに

日本とペルーとの本格的なつながりは、今から100年以上前、佐倉丸に乗った日本人移住者第1陣が到着してからである。その後もたくさんの日本人がペルーに渡り、現在その子孫は6世代を数えるまでになった。日本人の名字を持つ人々や日本人と思える顔つきの人々をよく目にする。ペルーで生活したり、子どもたちと学校で学んだり、日系現地校で日系人子女との交流活動をしたりしてペルーという国がとても身近なものに感じられた。そのペルーの首都リマに、在外教育施設であるリマ日本人学校がある。リマ日本人学校の児童生徒は、小学部1年生から中学部3年生まで、およそ50名前後の児童生徒が在籍している。本校では数多くの学校行事があるが、体育的行事の最大のもは「運動会」である。リマ日本人学校での運動会は、2つの運動会で構成されている。

その一つは、4月下旬の『日秘友好運動会』である。これは、リマに住む日系人を中心として行われる陸上競技会で3日間の予選競技の後、本選を迎える本格的な大会である。競技にはリマ日本人学校小学部3年生以上の児童・生徒や教師が、短距離走・リレー・走り幅跳び・砲丸投げなどたくさんの種目に出場し、日本人学校を含む日系現地校によるダンスも行われている。この運動会で、日系のお年寄りの方々や日系現地校の児童生徒は、日本人学校の発表を毎年楽しみにしていることを耳にした。そして、もう一つは、6月上旬の『リマ日本人学校運動会』である。これは、小学部から中学部の児童生徒を紅白に分けて、徒競走や団体競技、交流校リレー、紅白対抗リレー、そしてダンスなどを行う。基本的には日秘友好運動会で披露したダンスをリマ日本人学校運動会でも披露している。

私は、リマ日本人学校在籍中の3年間、健康安全部の分掌を担当し、どちらの運動会にも携わることができた。特に2年目3年目は体育主任として、先生方と子どもたちと運動会のダンスに取り組んできた。そのなかでダンスに対する子どもたちの気持ちや姿勢について、あるいは、ダンスを楽しみにしている日系人の方々の期待などいろいろと考えてきたことを、その取り組みを中心に、これから述べることにする。



やっちょれ（ソーラン節）の練習風景（資料1）

2. 運動会におけるダンスへの取り組み

(1) 1年目の活動

赴任した1年目は、まだよく分からないことが多く、練習の仕方や子どもたちの様子を観察することが中心になった。これまで発表していたダンスは、やっちょれ（ソーラン節）であった。これは、日本の民謡であるソーラン節を使い、日系人の方々も耳にしたことがある（遠い国に住み、日本を懐かしく思い出すことができる）し、子どもたちにとってもリズムに乗って楽しく表現することができるダンスである。それに、はっぴを着て、豆絞りを頭に巻くことから、海外で日本を感じることができ、日秘友好運動会でもリマ日本人学校運動会でも発表するのにふ

さわしいものであると思えた。(資料1)しかし、子どもたちの様子をよく見てみると、何となく動きがピリッとしていなかったり、表情にも笑顔が少なかったりしているように感じられた。

そこで、中学生を中心に子どもたちにダンスの感想を尋ねてみたところ、「踊っていて楽しいけれど、同じものをやっていると・・・」「別のダンスもやってみたいなあ。」という反応が返ってきた。他の先生方とも相談をして、学年末に子どもたちへ「他のダンスを来年は発表してみようか?」と提案してみた。子どもたちは、「やってみたい。」「でも、どんなダンスにすればいいのかなあ。」という期待と不安の返事だった。子どもたちに楽しんでダンスに取り組んで欲しかったことと、見ている人(日系人の方、保護者)にもこれまでと違うダンスを披露することで日本人学校への期待も変化し、高まるのではないかという思いが自分のなかに芽生えることになった。



日秘友好運動会のダンス(資料2)

(2) 2年目の活動

年度末に子どもたちと話し合いをしていったが、中学生でもダンスを作ったり、見たりした経験が少なく、なかなかアイデアが出ず行き詰まることも度々であった。そこで、日本の原籍校から以前体育大会で踊ったダンスのビデオと音楽を取り寄せ、子どもたちに紹介することにした。前年までの曲の動きよりもアップテンポのリズムダンスに中学生も小学生も目を輝かせて、汗びっしょりになりながらビデオや曲に合わせて体を動かしていた。年度末からの取り組みを継続しつつ4月になり、小学部1年生が入学し中学部、小学部5、6年生を中心に本番まで練習を積み重ねることになった。今までの隊形とは違い、中学生が教師と一緒に考えてそれを考え、衣装もはっぴ、豆紋りからボンボンを手にして、日秘友好運動会でダンスの出来映えを披露することができた。(資料2)子どもたちは、今までとは違うリズムや動き、表現の仕方に楽しく取り組んでいたようである。リマ日本人学校運動会でも、限られた運動場の広さに対応できるように隊形を変化させて、来賓である日系人のお年寄りや保護者の前で楽しく踊ることができた。

しかし、またここで自分のなかに子どもたちの新しい表現やリズムへの欲求を叶えたいというのと、日本人学校として日本らしいものを現地の日系人の方々に披露し続ける大切さ、役割があるのではないかという考えが2年目年度末に浮かび上がってきた。そして、再び中学生たちに来年はどうしていくかを尋ねることにした。やっちょれ(ソーラン節)とリズムダンスの両方を経験し、それぞれのよさを理解しながら教師側の願いを取り入れることができるかどうかも含めながら話を進めていった。最終的には、日本らしさがあり、伝統的に取り組んできたやっちょれ(ソーラン節)と新しく取り組んだリズムダンスをつなぎ合わせて3年目の運動会で披露することになった。

(3) 3年目の活動

年度末に2つのダンスを組み合わせることで表現することになり、曲のつなぎ合わせをし、隊形と移動などについての練習が、4月から本格的に動き出した。曲の長さについては時間の関係もあり、教師が5分間にまとめ、動きも違和感のないようにつなぎ合わせるようにした。中学生は、両方の動きをマスターしているので、前年と同様に中心となって下級生たちに指導した。特に、初めて取り組む小学部1年生には、教師も一緒になって指導したり、朝運動の時間を使って練習をしたりした。それに隊形や移動についても前年までの経験を生かしながら、中学生が意見を出し合い、徐々に完成に近づけていった。そして、日秘友好運動会当日、はっぴを着て、豆紋りを頭に巻き、手にはチャクチャという楽器を持ちながら、たくさんの日系人の方々や日系校の児童生徒、保護者のみなさんの前で

堂々と楽しそうに踊る子どもたちの輝いている姿があった。その後のリマ日本人学校運動会でも同様に、子どもたちみんなのあふれる笑顔いっぱいの楽しい表現となっていた。踊り終えた子どもたちの満足な表情が今も頭の中に浮かんでくる。

3. 最後に

リマ日本人学校運動会のダンス指導の取り組みで、最初の2年間に比べ、最後の年の子どもたち特に中学生の顔つきが随分と変わったように感じられた。以前からやっていたものに加え、新しいものを経験し、自分たちで隊形や移動を考えたことが自信にもつながったようである。

また、1年目のやっちょれ（ソーラン節）から2年目のリズムダンス、そして3年目のやっちょれとリズムダンスの組み合わせという取り組みから、

- ・日本人学校の子どもたちにとって、同じものを毎年繰り返すことは、意欲が低下し、表現する楽しさを感じられなくなってしまう恐れがある。そこで、ときには目先を変えて新しいものを取り入れてみることも大切である。つまり、ここでの表現運動やダンスを通して教育的効果が得られるように努めることが大切である。
- ・日本から遠く離れた場所でたくさんの日系人が暮らしているペルーにおいては、日本の伝統的なものを日本人学校に期待しているので、それを途絶えさせてしまうことのないようにすることも大切である。ちなみに、日秘友好運動会では、ラジオ体操も日本に触れるための一つとして演技をするお年寄りたちがいる。日本人学校運動会においても演目の一つとして取り組んでいる。

ということがわかった。したがって、在外教育施設においては日本と同等の教育を期待されるので、その時その時の真新しいものを取り入れるようにしていくのと同時に、日本から離れた場所で生活する子どもたちや現地の人たちに日本の文化や伝統をつなげたり、広めたりしていくことが大切である。在外教育施設では、新しいものとそれまで培ってきたものをバランスよく子どもたちの教育活動に生かして、実践を積み重ねていく必要があると言える。